

1928 離島覚書（長崎県・漁生浦島）



若松島・林道鬼ヶ原線開通記念碑より漁生浦島を望む

令和元年 10 月 18 日

漁生浦大橋

新上五島町には中通島、若松島の他に、有人離島が 5 つある。このなかで桐ノ小島 (0.04 km²) に次いで小さいのが漁生浦島^{りょうせがうら}で、面積 0.65 km²、周囲 4.2 km にすぎない。ちなみの残りの 3 島は、日島^{ひのしま} (1.39 km²)、頭ヶ島^{かしらがしま} (1.88 km²)、有福島^{ありふくじま} (2.97 km²) だ。標高は 89m で、新上五島町の 7 島のなかではやはり桐の小島に次いで低い。

漁生浦島は若松島北端の小瀬戸を挟んだ対岸にあり、瀬戸の幅は 100m もない。狭い瀬戸は急流である。1979 (昭和 54) 年に全長 112m の漁生浦橋ができ、若松島と陸続きになった。赤く塗られた橋の下を白波をたてて川のように潮が流れている。

橋が架かる前の 1970 年に漁生浦島と有福島との間に、また 1973 年に有福島と日島との間に防波堤道路ができていたので、漁生浦橋の開通によってこの 3 つの島は若松島と陸続きになった。有福島の出身で日島の松園水産の定置網で働いている矢口さんは中上五島高校に通学していたが、橋ができる前は、船で若松島に渡り島内をバスで移動しさらに船に乗り換えて中通島にある中上五島高校に通学していたそうで、朝 6 時に家を出て学校まで 2 時間かかったという。橋ができたことでこうした不便さから解放された。

橋は片側 1 車線である。橋のたもとには比較的規模の大きな漁業を営むと思われる漁業者の漁具倉庫があり、敷地内には箱型のタコツボがうず高く積まれていた。

橋を渡ってそのまままっすぐに進むと有福島に至る。坂の登り口を右折した海岸道路沿いに漁生浦島の集落があり、突き当たりが若松漁協の事務所で、道はここで途切れる。この間は約 300m ほどにすぎない。漁協の前には日島漁港 (第 1 種) の漁生浦区が整備され、

曳釣りの漁船が5～6隻係留されていた。



小瀬戸の潮の流れ（左）、漁生浦橋（右）

旧村役場

1956（昭和31）年に旧若松村と合併する以前は、漁生浦島は日島村に属していた。日島村は漁生浦島、有福島、日島の3島と若松島の西半分が村域だったのである。そして日島村の村役場はこの漁生浦島に置かれていた。役場に行くには船しか交通手段はなく、どの島からも中間地点にあったことが人口の最も少ない島に置かれた理由に違いない。

その後、若松村と日島村が合併して若松町が誕生、さらに2004（平成16）年の平成の大合併で、現在は新上五島町になっている。

つまり、漁生浦島はかつて行政の中心地だったのである。現在は若松漁協の事務所が置かれているだけで、郵便局も役場の出先も診療所もない。もちろん商店や飲食店、宿もゼロである。島には日島小学校漁生浦島分校が置かれていたが、1973（昭和48年）に閉校している。ちなみに島の児童生徒は現在、若松島にある若松中央小学校、若松中学校にバスで通学している。

2015年国勢調査時の漁生浦島の人口は30人、世帯数は11戸であった。高齢化率は43.3%に及んでいるが、年少人口は6人おり、決して高齢者中心の集落ではない。2019年9月末時点での住民基本台帳上の人口は28人、世帯数は12戸であったから、国勢調査時と大きな変化はない。ちなみに半世紀前の1970年当時の人口は101人、世帯数は24戸だったので、世帯数で1/2、人口は1/3以下に減少している。

2015年国勢調査時の就業人口は14人で、そのうち漁業が10人であることから、この島の産業は昔から漁業に大きく依存してきた。日本離島センター発行の「シマダス」によると、昔は「^{りょうつき}獵尽島」と呼ばれていたそうだが、幕府に願い出て1740（元文5）年に現在の漁生浦島に改められたと書かれている。文字通り、漁生浦島は漁業で生きる浦だったのである。

集落は島の南すみの1ヶ所で、山際と海の間細長く形成されており、家は2列に並んでいる。以前は段々畑が続いていたようだが、背後は山林に覆われ、平地はほとんど存在しない。現在の海岸道路は漁港の整備に伴って造られたもので、海岸線は家の前まで迫り、狭い道路が家と家のあったと思われる。集落背後の高台には乙宮神社が置かれている。

漁生浦橋を渡り、右折して集落前の道路を通って、先端の若松漁協に向かう。



海岸線沿いに細長く形成された漁生浦島の集落（左）、海岸沿いの道路と家並（右）

若松漁協

若松漁協は旧日島村に属した集落の漁業者によって組織されている。すなわち、漁生浦島、有福島、日島の3島と若松島の西部地区である。

漁港では、ちょうど日島の松園水産の大型定置網が水揚作業をしているところだった。かなり激しく雨が降っており、急いで漁協の事務所に飛び込むと若い女性職員がいるだけだった。彼女の話では組合長は非常勤なので顔をだすかどうかわからないとのこと。

一旦、有福島、日島を回り、午後から再び漁協に出向くと、山下参事がいた。30歳代と思われる若い参事である。午前中、定置網の水揚を手伝っていた人だった。若い割にはしっかりしており、地元の漁業に精通していた。山下さんに手短かに話を聞く。

漁協の正組合員は44人で、このうち漁生浦島に住む組合員は6人である。同漁協の組合員が営む漁業種類は、大型定置網、曳釣り、タコツボ、延縄、一本釣り、刺網、採貝・採藻、潜水器（ヘルメット潜水）漁業であり、水げの中心は2ヶ統の大型定置網（有福島と日島にそれぞれ1ヶ統ずつ）と曳釣り、タコツボである。養殖業は筒ノ浦でヒトエグサ（1経営体）、柿で真珠母貝養殖（1経営体）が営まれている。また若松中央漁協所属の山田水産にマガキの区画漁業権漁場を貸している。

漁生浦島では養殖業は営まれておらず、漁業のみでこのうち曳釣りとタコツボがメインである。

漁協の職員は山下参事と女子事務員の2人で、購買、販売の事業を主として営み、販売部門では2隻の運搬船を保有し、長崎市まで運び、県漁連経由で主として京都方面に出荷している。

若松漁協の組合員の中で漁生浦島に住む正組合員は6人である。組合員が営む漁業は曳釣りとタコツボで、両方の漁業を兼業している。



若松漁協の荷捌き場

曳釣漁業

漁生浦島の漁業の中心は曳釣りである。

曳釣りは6人の正組合員全員が営み、漁獲対象はタチウオとクロマグロ（ヨコワ）だ。タチウオの漁期は9～10月と1～3月の約5ヶ月間、クロマグロは12～2月までの3ヶ月間である。残りの4～8月はタコツボを営む。なおタコツボの経営体は曳釣りよりも1経営体少ない5経営体である。

現在、クロマグロの漁獲には総量規制がかけられており、若松漁協全体の割当枠は年間19トンである。漁生浦島の総漁獲枠は6トンであり、1隻あたり年間1トンが割当てられている勘定になる。クロマグロの総量規制が実施されてからは漁獲努力量がタコツボに向けられるようになり、タコも水揚げが増えているという。

漁港には漁船が荷捌き場近くに5隻、反対側に1隻置かれていた。曳釣りの漁船は2本のトローリング竿を船の両側に立てているのですぐにわかる。何れも曳釣りの船だった。こちらの曳釣りは潜航板を使用し、餌は疑似餌だ。

准組合員を中心に営まれているのが採貝・採藻で、5～6月にかけてマフノリやテングサが自家消費程度に採られている。



日島漁港に係留されている曳釣りの船